

『活動の奇跡——アーレント政治理論と哲学カフェ』

三浦隆宏〔著〕、2020年、法政大学出版局

〔評者〕

北野亮太郎

KITANO Ryotaro

本書は、ハンナ・アーレントにおける活動（action）の政治的意義と、著者が精力的に関わってきた哲学カフェが持つ、公共空間としての意義の検証という二つの問題を論じたものである。本論と三つの補論が収録され、それぞれ三章と一つの補論でまとめられた三部構成となっている。

第一部、「複数性・活動・自由」では、人間の複数性を中心とした、政治をめぐるアーレントの思考の総体を整理した上で、政治の場としての哲学カフェについて論じられる。

アーレントが人間の複数性に注目するのは、全体主義やそれを導出した西洋哲学の伝統が、複数性を担保する人と人との「あいだ」を破壊する特徴を備えていたことによる。その「あいだ」を再び創造するために、アーレントは他者の存在を条件とする活動の重要性を主張する。そして、現代における活動の実践として、哲学カフェが論じられる。

哲学カフェとは「十数名ほどの参加者が、約二時間ていど、あるテーマについて、自分の意見を言い、他人の意見を聞く営みである」とされる（本書32頁）。そこでは、個人的な意見が尊重され、意見を表明することで自身の正体（who）を現わすことができる。こうした場を著者は、互いが平等に尊重され自由が経験される点で、アーレントにおける活動を行う政治的領域だとする。

第二部、「哲学と市民のあいだ」では、哲学カフェが政治的に果たす具体的な役割について考察している。

まず、著者は発言し続けることの政治的意義を明らかにするため、アーレントの人権論に注目する。人権は、普遍的な権利であるとされるが、実際には国家のような共同体に参加していなければ持つことはできない。この共同体を著者は人間世界と呼ぶ。そのため、言葉による活動で人間世界に現われる必要がある。しかし、著者はそうした「言葉を発する権利」をも奪われた人々を想定することが現代社会において重要だとする。典型的な例として性犯罪被害者を挙げている。そのような人々は公的領域で言葉を発することが難しい。そのため、言葉による活動を前提としたアーレン

トの人権論の場合、その存在が現われず、一向に人権が与えられない。そうした声なき者の声を聞く場としての哲学カフェと、その声を聞き代弁する「アドヴォカシー」の必要性を著者は主張する。

次に、著者は哲学カフェが持つシティズンシップ教育の役割について論じる。それは、参加者が議論する中で、「私」ではなく「私たち」の感覚を醸成することであるとされる。そのためには、進行役が「積極的消極性」という態度をとることが有効だと主張する。これは、進行役が言論の場から積極的に後退することで参加者全員に主体的な議論を促すことに努める態度である。これによって哲学カフェは、進行役に場が管理されない不完全な空間となる。この不完全性が参加者に言論への積極的参与を促し、「私たち」の感覚をもたらすのである。

第三部、「活動を支え、語り継ぐものたち」では、活動が十全に行われるための諸要因について考察している。

まず著者は、アーレントの議論における道徳性の問題を取り上げる。アーレントは思考と道徳を結び付けようとしたものの、思考は常に自己を基準とするため、他者に関わる道徳的行いや、道徳的尺度を示すことができなかった。そこでアーレントが目にしたのが反省的判断である。判断の妥当性は自己ではなく共通感覚に、つまり他者の存在に依存する。そのため道徳的な判断は、他者によって期待され、決定されることになる。

こうした他者が持つ具体的な意義を、当事者カフェの事例から考察していく。当事者カフェとは、認知症患者や震災被害者、またそうした人々の関係者といった人びとが形成する言論空間のことである。当事者カフェは、哲学カフェと異なり、患者の支援施設や被災地域の公共施設など、当事者にとってのホームグラウンドで小規模に行われる例が多い。このような特徴から、著者は当事者カフェを私的領域の内にありつつ公的に開かれた場という意味で、「闕」タイプのカフェと呼ぶ。こうした空間では意見の表明ではなく、語り（ナラティブ）が起きやすいという。同じ悩みを持つ者どうしの親近感と、私的領域の中に守られている安心感がそうした語りを引き出すのである。

著者によれば、語りにとって重要となるのが、それを聞く他者としての観客や傍観者の存在である。アーレントにおいて、議論全体を俯瞰し、把握できるのは他者のみであるからだ。こうした他者が、数ある語りを判定し物語として形に残す。つまり、アーレントにおける歴史家、詩人、物語作家としての役割を果たす。こうして物語を語り、それを残すことは、現代という「暗い時代」の中で、未来に対する希望となり、また、世界への新参者に向けて「新しい地平を開く」ことへとつながる、と著者は締めくくる。

アーレントの概念を用いた近年の公共性の議論は、サードプレイスや地域コミュニティ形成への関心と結びつき、比較的小規模な公共空間を積極的に評価、検討しているように思われる。こうした議論の中で論じられる公共空間の具体的な形はさまざまだが、本書は其中で、特にカフェという空間に注目し、その政治的意義を論じたものであると言える。このような小規模な公共空間の長所は、その実践が比較的容易である点である。特に哲学カフェの場合、既に多く開催されており、それに参加すればアーレントにおける政治的領域の中での現われを実感することができる。また、公共空間の意義が、討議の場としてだけでなく、サードプレイス的な心地のいい憩いの場としての側面も含むものへと変質している中、意見を言い合える哲学カフェや、語りを行える当事者カフェのように、目的に即して役割を変化させることができるという点も、カフェという公共空間の長所だと言えるだろう。

また、本書が持つ独自性として、そうした公共空間にしながら、言論による活動を行わない周辺の他者を積極的に評価していることが挙げられる。アーレントの概念を用いた公共性の議論は、活動する者を重視し、いかに活動を行うかを考察することが主であった。しかし、活動を行うには、それを促し、議論を調整する者や、それを見聞きし、語り伝える者が必要である。本書が示した、活動する者と見聞きする他者との相補的な関係性の意義は、今後、公共性の問題を考える際、特に活動ができない弱者に積極的な役割を見いだすために有益な要素だと言えるだろう。

さらに、本書を手掛かりとして、また別の重要な論点が引き出せるように評者には思われる。公共空間で活動を見聞きする他者が持つべき技術についてである。本書では、カフェの進行役が持つべき「積極的消極性」のような、その場をより良いものにするための技術の重要性が示されていた。それでは、歴史家、詩人、物語作家になるべき他者はどうだろうか。アーレントにおける歴史家などの人びとは、ただ他者として語りや議論を聞くだけでなく、見聞きしたことを形に残し伝える技術を持っている必要があった。公共空間において他者が持つべき技術が明らかにできれば、より他者の積極的な評価につながるのではないか。今後一層の議論が必要なテーマであると思われる。